

これから 社寺林を 考える

社寺林の価値は、
自然林としての学術的価値にとどまらない。
地域の身近な自然として、
これまで以上の積極的な保全策が望まれる。
現代社会のなかで
人々とのかかわりを失いつつある、
社寺林のこれからを考える。

● 信仰心の衰退と経済優先の時代

岡島 最初に、吉良先生から社寺林の現状というか、全体的なお話をしたいと思っています。

五三年、五四年の環境庁調査によると、照葉樹林の群落の多くは社寺林だという結果がありますね。ああいうことから考えると、都市部における緑としては、社寺林のもつ意味はやはり大きいんでしょうか。

吉良 平地部の緑としては、社寺林が非常に大きな役割を占めていることは確かですね。それも照葉樹林として残っているというのが特徴です。事実上、もう山には照葉樹林はないですから、そういう意味で、まず学問的な価値は非常に高いですね。

岡島 結果的に残されたものでしょうか。それとも意識的に……。



吉良 それは極めて強く意識的に残してきたと思いますね。我々が子供のとき、私は大阪、河内育ちですけども、子供でも神社の森の中へそう入りませんでしたから。

岡島 怖いというか……。
吉良 何となく入るのがはばかられるような雰囲気というものがありませんね。そうした極めて宗教的なものがある。

● 都市のなかのいい場所に残った緑

岡島 田村先生が横浜市の企画調整局長でいらしたころは、一番都市化が激しかった時期じゃないかと思うんですが、いかがでしょう。

田村 全体的に見ると、結局、便利などころは全部開発されて、計画的に緑を都市の中に残していくということ

残してきたんだと思います。お寺は違いますけれども、神社の森というのは、そもそも入らないということが信仰の条件に入っていたように思いますね。近ごろはどんどん下刈りしたり何かしますけれども、それも本来はしなかったんだと思うんです。だから、照葉樹林帯では手をつけずにほうっておくから照葉樹林の典型的な姿が残っているわけです。

岡島 そういう神社の森も幼稚園や駐車場にしたりして、随分少なくなっている。恐れがなくなると、経済の方が先に立つようになったんでしょうか。

吉良 多分、戦争に負けたところを境にして、急激に神社に対する信仰心というのがなくなってしまったですね。今でも初詣にはたくさんの方が、しかも若い人がうんと行くんですが信仰心はないですね。第一神主さん自身になくなっていくんですよ。昔だったら神主さんはそんなことはしなかったですが、今はもう食っていけないから、幼稚園をつくる、結婚式場をつくる、道路が通るときに、道路の敷地に売るということになってしまっているんだと思うんです。

をやらなかったし、ましてつくることはやらなかった。昨年、イギリスに一カ月ぐらい滞在していたんですけども、何遍行ってみても、街の中でも緑は大変多いです。それで、ちょっと計算をしてみたいです。
東京も横浜も、公園緑地と称するも



横浜市金沢区の称名寺。真言律宗。1269年（文永6年）、北条実時が阿弥陀堂と金沢文庫を設立。実時の法名をとって寺号とした。称名寺境内として国の史跡に指定されている。現在、寺城の庭園などの整備がすすめられており、62年度末には、鎌倉時代の姿が復元される。

の一人当たり二平方メートルしかないので、一人当たり二平方メートルしかないんですが、ロンドンには、一人当たり大体三〇平方メートル余りあるわけですね。この差を東京の平均的な地価を基礎にお金に換算してみたいです。そうすると軽く見て二〇〇兆円を超えるんです。都予算の投資的経費を仮に一兆円として、これを全部投入しても二〇〇年かかるといっていいです。しかし、全部ということはあり得ない。それで、現在は数パーセントしか当てられていないのですが、仮に一割やったらしても二〇〇年かかるといっていいです。だから、二一世紀、二二世紀と騒いでいるんだけど、緑の問題に関しては、ロンドンに対して、東京はちょうど二〇〇〇年、二一世紀分おくらせているんじゃないかな。一つの計算ですけども、そういうことも成り立つ。そうしたなかでなおかつ残っているところは何かというと、横浜の場合で

すと社寺林とか、開発されにくい斜面林とか、あるいはよっぽど交通が不便だったところなんです。

緑の量として考えると社寺林の占めている比率は、そんなに大きくはないと僕は思います。でも、社寺林というのは、今となっては、比較的都市の中ではいい場所にあるんですね。小さくてもいい場所に。それだけに貴重です。ただ、社寺林だから残されるという保証はこれからはほとんどないですけれど。岡島 具体的な事例は何かありますか。田村 私が横浜市に入ったときに、

開発の圧力に対抗する新しい価値を

岡島 神社だからということでははうっておけないとすると、由緒正しい歴史のあるところだからということ、そこに住んでいる人が評価して、社寺林などを地域の緑という形にとらえ直していかないと残らないだろうと思うんですけども、その辺、吉良先生、いかがですか。地域の緑としてとらえる住民の中の機運といいますか、そういうものが生まれているところはありますか。

吉良 生まれているところもあると思います。しかし、率直にいうと、まだまだ非常に少ないと思います。特に、都市近郊の住宅開発がどんどん進んでいるところというあたりでは、残そうという意識は非常に弱いんですね。つまり、これまで田舎であったところに住んでいる人たちが持っている開

問題になっていたのは称名寺の件ですね。金沢文庫で有名なところなんです。お寺の景観は背後の山があつてはじめて成り立つただけでも、その山を全部売って開発することになっていました。山がなくても人が来るのに別に構わなかったのかもしれないけれども、やっぱり山に囲まれてこそ称名寺なので、それをやめさせるべく、いろいろやりました。最終的に見える部分の一枚だけ残すことができた。横浜の中で一番由緒正しきところでもそういう具合ですから、ましてやほかのところは全く保証できないんですね。

田舎の人というのは、例えば木がこんもりと茂っているというのは余り好きじゃないんですよ。関西の言葉でいいますと、うっとうしいというんです。何となく暗いということでしょうね。それで、パーツと全部切ってしまうと、「ああ、うっとうしいのがうなつた」といって喜んでですね。そういう気風はまだ田舎には強いですが、非常に危ないですね。それをもう一遍見直すという意識をつくるためには、相当いろいろな誘導が必要なのだと思います。

岡島 まわりに緑がいっぱいあつて、山も畑もあるといえ、そこにある鎮守の森というのは、あまり目立ちませぬ。しかし逆に都市化されるからこそ、

それに伴って社寺林の評価というものも上がってくるわけですね。吉良 そうです。すっかり都市化し



吉良 竜夫氏

てしまうとわかるんです。しかし何年か先を読んで、それが非常に大事になるということは、皆さん、なかなか考えないですね。

田村 みんなが開発しているときには、お寺や神社も一緒になって開発したって別に抵抗はないわけでしょう。しかし、本当はみんなが開発しているときに残さないと、もう都市化しちゃうってからは容易なことではないわけであつて、面積も大変小さくなっていますね。

岡島 一歩手前のところで新しい価値というのを見つけていかないとけないし、価値を見つけないための評価軸みたいなものを何かあてないといけないだろうと思うんですね。

吉良 そうですね。いろんな面から見直すべきだと思います。例えば、大きな木があるとか、あるいは子供の自然教育にとって非常に有効だとか、あるいは学問的に大変貴重であるとか。

田村 一五、六年前になるけれども、

宗教法人に対しては、それなりに税金の免除があったり、随分保護されて

●望まれる住民の参加意識

岡島 社寺林をうまく活用して、地域の緑の核にするような残し方ができるといいと思うんです。それも、住民運動とうまく結びつけるとか……。

吉良 私はそういうことをしてほしいわけです。例えば社寺林を地域の公園にしてしまおうというのが一つの方法です。社寺林をコアにして、そしてそれは一種の聖域と考えて、そのまわりにバッファゾーンとして公園をつくらなければいけません。公園の要求というのは非常に強いわけですから、あとはそうしたことによって、そのお社を管理している集落なり、あるいは宗教学人なりに、それを提供したことに見合うだけのメリットがあればいいわけです。

田村 要するに、社寺林の一部を買って、そのまわりをプレロットか何かにするというケースですね。不動産屋に開発されちゃうよりはよっぽどましですね。

吉良 ところが、実はこれも難しいんです。滋賀県の場合でいうと町民の森なんて随分あちこちでつくっていますけれども、要するにそれは、土地が手に入ったところなんです。つまり、そこが町民の森として一番いい条件を備えているかどうかではなくて、土地が買えたから、土地が手に入ったからそこに町民の森をつくったと

いる面があるんだから、地域社会に対して大きな責任を持ってもらいたい。

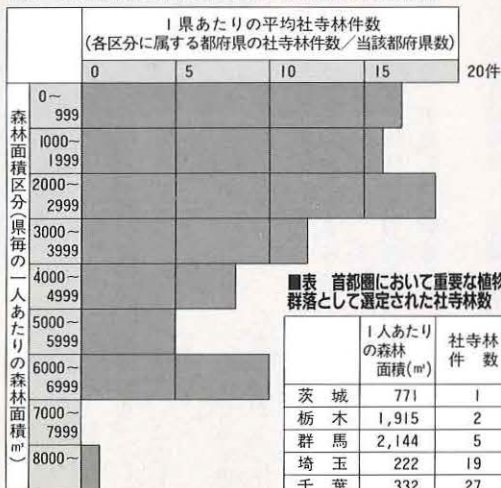
田村 横浜にちよつと違う例があります。まず、土地は買わない。いや、買えない。それで、市民と契約関係を結んでいるわけです。これは長年、行政の間で山林を持っている人たちのおつき合いがあって、そういう信頼関係の中でできている話なんです。だから、いきなり何か制度をつくってやろうとしてもそう単純なものじゃない。長年のおつき合いの中の知恵と工夫の中で、売り払っちゃうよりも、こうい

うのが多くいんです。一般的に、何々の森というけれども、結局は従来どおりの公園なんです。もとの木は相当切ってしまったって、いろんな花の咲く木を植えたりして……。

田村 横浜にちよつと違う例があります。まず、土地は買わない。いや、買えない。それで、市民と契約関係を結んでいるわけです。これは長年、行政の間で山林を持っている人たちのおつき合いがあって、そういう信頼関係の中でできている話なんです。だから、いきなり何か制度をつくってやろうとしてもそう単純なものじゃない。長年のおつき合いの中の知恵と工夫の中で、売り払っちゃうよりも、こうい

都市化の進行と社寺林への関心度

■図 関心度の高い社寺林の件数と一人あたりの森林面積



■表 首都圏において重要な植物群落として選定された社寺林数

	1人あたりの森林面積(㎡)	社寺林件数
茨城	771	1
栃木	1,915	2
群馬	2,144	5
埼玉	222	19
千葉	332	27
東京	69	15
神奈川	128	17

資料：第2回自然環境保全基礎調査・特定植物群落一覧表(全国版)、1979。環境庁

日本アルマナック1986年版、教育社

都市化の進行にともなって、緑の量は必然的に減少する。雑木林が姿をけし、田畑が宅地になっていく。そうしたなかで、緑への関心が徐々に高まり、その対象として社寺林などの「残った緑」への期待度もふくらんでいく。

環境庁の実施した特定植物群落(日本の重要な植物群落)調査を例にとろう。

この調査は一定の基準をもとに、都道府県ごとに重要な植物群落を選定するもので、社寺林も「郷土景観を代表する植物群落」、あるいは「原生照葉樹林」などの理由で、数多く選定された。従って、それらの社寺林は、各都道府県の全体的な緑のなかで、とくに重要と判断された緑ということができ、またその件数の多少は、それぞれの都道府県の「緑の状況」を反映した社寺林への関心度を示すものといえる。

図は、重要な植物群落として選定された社寺林(謂わば関心度の高い社寺林)の件数と、都市化の指標としての「一人あたりの森林面積」の関係を示したものである。一人あたりの森林面積が小さい区分で、重要な緑としての社寺林の件数が多い傾向にある。これを首都圏についてみると、東京都とその周辺で急激に都市化がすすむ埼玉・千葉・神奈川で数多く選定されている。

うふうにした方があなたにとってもいいのではないかと。先祖伝来の土地を森として残したらどうかと。そして地域全体としても、そういうものがあつた方がいいんじゃないかと。

吉良 私もやはりまず地元の人だと思えますね。新住民と旧住民が一緒にあって運動を起こすという形がいい。そういうときに、ちよつとその神社の森の中に、その県としては珍しい巨木があるなんていうのは非常にやりやすいと思えますね。何かほかに対して自慢ができるんだというものがあつると、地域の人は大切にしようという気になるんです。

岡島 なるほど。

吉良 そういうことを各地で展開するには、例えば「県の百名木を選びます。皆さん投票してください」なんて

ことをやるといいと思うんです。それも一年ぐらいやるんですよ。途中で中間発表をする。

岡島 オールスターの人気投票みたいなものですね。

吉良 そうすると、あんなものがそんなにたくさん票が入っているんだつたら、うちのをもつと入れようか、という動きになってくる。

岡島 それは一つの具体的なノウハウですね。参加意識ですね。

吉良 そういう方法で一遍ワーツと意識を盛り上げてから、土地の新聞社に片棒を担いでもらつてやるのか、そういうふうなことをするのが一つの方法だと思えます。

田村 森林百選とか名水百選とか、いろいろあつて、まず全国的な関心を呼び起こすのもいいんだけど、実際にはそれぞれの地域でやらないとね。

百選のうちの一つだというもので、実際に地元に行って聞いてみると、本当に近くならともかく、意外にどこか知らないということがある。

いろんな媒体に書いてもらうと、何となくその気になるし、まわりの人間も、おれたちの近くにそんないところがあるのかという感じを持ちますから、それは大いに新聞などに頑張っていただかなきやいけないところだと思いますね。

岡島 そういう機運の盛り上がりとは制度的な裏づけですね。

田村 それと行政体質を変えないとね。幾ら制度をつくったって、制度を運営するのは人間だから、制度をつくただけでは不十分ですね。

岡島 とにかく一番いいのは、どこかにモデルケースになるようないい社寺林があつて、それを新聞やテレビで地域全体に広げる。そして、たくさんの人が我々もそういうのをやってみようというふうになればいいんですけども……。

田村 すばらしいというほどでなくても、現状がよければどんどんピアーールすればいい。あとはそれをどういう方法でより良くするかということにすればいい。

岡島 地域の人々の声を盛りあげて、そして、行政、マスコミ、それぞれみんな少しずつ頑張らなきゃいけないということですね。せつかく残っているところなんです社寺林を何かうまく利用していきたいですね。

半島の野イチゴ

吉峯 明美

特産の砂糖きびの収穫が終わると同時に暗く陰うつな冬が去り、一年中で最も美しい島の春が訪れる。子供達は野山に飛び出し、素足で春の到来を喜んだ。

若者に人気の与論島越しに沖縄の北部半島が臨める南国沖永良部島に私は生まれた。珊瑚礁が取り巻く周囲六〇キロの小さな島である。亜熱帯性の温暖な気候はアダン、ソテツ、ガジュマルといった樹木を育て、野山には野生のミカン、バナナ、山桃、万次郎、トケイソウ（万次郎、トケイソウと日本名で言うよりはグアバ、パッションフルーツと英語名で言った方が現代の日本人にはわかりやすいだろう）などの果物を実らせ、四季を通じて美しい花々を咲かせてくれる。

小学校では花当番があつた。週番係が、

「今週の花当番は誰々さんです。」
学校からの帰り道は楽しい花摘み道草。刈り取りが終わった後の妙に広々とした砂糖きび畑、朝顔に似た葉形を持つ緑濃い薩摩芋の畑、藪の中、林の中、子供達は何処にでも花を見つける。「あつた。あそこにグラジオラスが咲いている。」

「あつ、あそこにも。ユリも咲いているよ。」
すると花摘みよりも野イチゴ探しに夢中になっていった誰かが、
「ねえ、ここにイチゴがたくさんなってるよ。」

たちまち子供達は花摘みを忘れイチゴに群がる。小指の先程の小さな野イチゴがその覆っている萼を思いつきり広げて真赤に熟れた姿を剥き出しにしている。パクリと一口。
「おいしい……。」
「本当においしいね。」

誰もがお喋りを忘れ次から次へとイチゴを口に運ぶ。
「日曜日、半島までイチゴ取りに行こうよ。あそこなら、まだ一杯残っていると思うよ。」
「賛成。行こう、行こう。」
野イチゴでお腹を膨らませ、両手に花を抱えて石コロがゴロゴロ転がっている凸凹道を胸弾ませて帰宅する。母の、先生の喜ぶ顔が頭にちらつき、
「早く明日が来ないかな。」
と、まるで遠足に出掛けるような気分を待たせられる。

学校へ持って行く花を、つるべ井戸から汲んだ水のたつぷり入ったアルマイトのタライにつけ、残りには家に生ける。神棚、床の間の花生けはどこの家でも子供達の仕事。祖先を敬い、自然の恵みに感謝する気持ちを持つことをこうして子供達は教えられた。
そして日曜日、手に手にアルマイトの小さな弁当箱を持った子供達は村の辻に集まって、いざ野イチゴ取りに出陣。萌えるようなセンダンの新芽が春

の日射しに輝き、道端にまるで街路樹のように連なって自生しているソテツが、太陽を独占しようとはばかりに大きく葉を広げている。砂糖きび畑の向こうに水平線を見せて静かな東シナ海が見える。
「もう、イチゴ残ってないかもしれないね。」

誰の顔も不安気である。果たして先入者に荒らされていけないだろうか。ブルドーザーがイチゴの木をなぎ倒していかないだろうか。開発を名目に島に侵入してきたブルドーザーは我が物顔に島の地形を変えつつあつた。
だが、イチゴは残っていた。埃を被り、虫に喰われてもいたが、たわわに実り残っていた。さらし綿を持つてきた者は絞ってジュースにして飲んだ。
誰の手も舌も唇も真赤々。

夕日が西に傾く頃、
「カラスが鳴くからかーえろ。」
「誰々ちゃんは恐いから、あのガジュマルの木に登れないだろう。」
突然、石コロが飛び交い、ケンカが始まる。仲良く遊んでも家に帰る頃になると必ずケンカになった。理由なんかなかった。ケンカも遊びの一部だったのだ。翌日になると何事もなかったかのように仲良く木登りに夢中になる子供達を、島の自然はいつも見守っていてくれた。

あれから二〇年、野山を駆け回る子供達の姿はなく、野イチゴの木も姿を見かけなくなつたが、私の脳裏の奥深くにはあの頃の自然が、人々の生活が今も変わらず息づき、郷愁の念にかられ、時折帰る懐かしい故郷である。